

No.74

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24)3947

三人の女 (50号)

北島 浅一

北島は「『三つの恋』も感興本位」の画家であった。この、萬鐵五郎が大正六年の第十一回文展で評した言葉は、その後の文展、帝展を通じた一般の評価となつてゐる。そして、そこからその画風の軽妙さを評価することばが出てくるし、また逆に、その軽々さを批判することばも出てくる。

北島のこの質は、フランス遊学においてさらに磨きがかかる。画布の肌地を残した絵具の薄く淡泊な使用、輪郭線を頭にした描法、これらの北島の画風のもつとも特質的な部分がこの時期に出来あがつたと言える。この作品はそうした中でも、きわめてすぐれた作である。大正一〇年遊学中のパリでサロン・ドートンヌに入選した「踊り場」と同手工の作品である。



目 次	○三人の女	表紙
	○北島浅一・御厨純一展	2 P ~ 3 P
	○資料紹介「詫田西分貝塚出土の銅鏡」	4 P ~ 5 P
	○刊行のご案内「佐賀県の歴史と文化ー目でみる郷土のあゆみー」	6 P
	○青銅器研究観書	7 P ~ 8 P
	○行事のお知らせ、館内販売図録案内	8 P

北島浅一・御厨純一展

大正から昭和にかけて、日本の美術界は大きな潮流の渦の中にあった。この時代、西欧からの新思潮の流入とそれとともにさながら芸術家たちの活発な制作活動、美術団体の結成と分裂が見られた。

こうした中、官設展を中心とした日本のアカデミズムの形成と維持のために多くの画家たちが集まり、美術界の大勢となっていた。

主 催 佐賀県、佐賀県教育委員会、佐賀県立美術館
会 期 昭和61年9月27日㈯～10月19日㈰(月曜日休館)
観 覧 料 大人500円(400円)／大・高生250円(150円)／中・小生150円(100円) ()内は団体料金、団体は20名以上
展示概要 油彩画 113点 素描 20点

北島浅一・御厨純一と第一美術協会

北島、御厨とその時代ということを考えるとき、活動の基点を、第一美術協会を軸とした制作活動として捉え、そこにおいて2人の作家が、いかにそこに自己を限定し、そのことでわが国の近代洋画史におけるアカデミズムの流れの中に、いかにとり込まれていったかを見ることが、彼らの時代を考える上で、ひとつの有効な視点を与えてくれるものと思われる。

この小論は、昭和9年、北島が第一美術協会を退会するまでの彼と御厨との共同の歩みを述べることで、アカデミズムに対して、無批判的に真摯でありつづけたもうひとつの小美術史を提供しようとするものである。

明治44年(1911)6月16日の夕刻、浅草の割烹店に25人(清原重一欠席)の東京美術学校西洋画科の同窓生たちが送別の宴を張った。このとき、画会設立の事に話が及ぶこととなり、「集散敷ナキ我美術界ニアリテ堂々旗幟ノ鮮明ヲ誇り、筆端萬丈ノ気焰ヲ吐クノ機 開トシテ」永続することを誓い、かくして「二十六人画会」が生まれた。会員は、明治45年(1912)3月西洋画科本科卒業の井上清一、大江九二太郎、神津港人、片多徳郎、萬鐵五郎、堤龍雄、工藤三郎、栗原忠武、倉智亮三、山下鐵之輔、浅井松彦、斎藤知雄、佐藤哲三郎、清原重一、北島浅一、御厨純一、三国久、平井成、杉江春男。同年選科卒業の野元義雄、金澤重治。大正2年本科卒業の大塚豊、江馬春吉、熊岡美彦、高橋信、清野善彌の26名であった。第1回の展覧会は翌45年4月に開催することを決めた。この会の特色は、当然のことながら美術学校の同窓会的な色彩が強かったが、このことは会則の第8条に明確に記された条文によって公然のものとされていた。曰く、「本会ノ性質上母校ト常ニ関係ヲ保チテ諸種ノ便宜ヲ仰グ事ト」。また次の第9条において「会員ノ外ハ何人ニモ出品権ヲ与ヘザル事」とあるところから見て、この「二十六人画会」の特殊な性格が浮き彫りになるとともに、ここにおいて先に述べた画会設立の「動機」にある「旗幟の鮮明」さの内容がむろん偏頗的な意味合いを帯びてくることになる。そして、この会としての性格

北島浅一、御厨純一はこうした官設展系の画家である。ともに明治20年に生まれ、昭和23年に没した。佐賀を故郷とし、東京で生涯を閉じるまで2人の画家はほぼ同じ道を歩んでいる。ただしその作風は、平稳ながらもたがいに個性を競い合う一面をもっていた。

本展では、この2人に注目しながら、2人の画家の対称の妙の中に時代の特性を見ようとするものである。

が、将来の第一美術協会まで受け継がれることになるのである。

そこに行くまでに、第一美術協会には、もうひとつの前史がある。それは、大正4年(1915)3月に組織された「銀会(しきがねかい)」である。会員は、金沢重治、工藤三郎、野元義雄、佐藤哲三郎、浅井松彦、平井為成、清原重一、三国久、神津港人、山下鐵之輔、御厨純一の11人であり、北島浅一は名簿に名前が書かれているが、線で消されており、このことは、おそらく彼が明確な意志によってではなく、この頃南洋サイパンに行っていたこととの関係からであったであろう。しかし、そのことは別に、先の「二十六人画会」の会員から見ても片多徳郎、萬鐵五郎らが抜けていることは、新たに作られた「銀会」にいたる数年の間に、「二十六人画会」の、最初のある程度個性を孕んだ結合体から、しだいに会としての柔軟性に欠ける集合体への変化が見てとれる。

この「銀会」は、第1回展を大正4年4月1日から8日まで読売本社3階で開催したが、その評は、読売新聞をはじめ、国民新聞、時事、中外、東京日々等で伝えられるところとなった。全体に堅実な作風における各自の個性的伸長を評価する傾向があるが、たとえば国民新聞の「色彩の濃厚な事、遊戯的に色彩を取り扱って居る事、後期印象派的筆技を用ふる事等は各自の共通点である如く見受けらるる」(4月3日付)などがそのもっとも代表的な論旨であろう。しかし、そこには美術学校出身の青年画家たちの真面目な創作態度と研究心についての評価とは裏腹の、あくまでも穏当な制作態度ひいては絵画運動の微弱性についての批判を感じさせるものがあった。彼らは着実にアカデミズムへの道をたどりつづけたと言える。

大正9年(1920)3月、ふたたび美校に同窓生による画会「四十社」が結成される。この会はいわば、「二十六人画会」の焼き直しの様なもので、明治40年に美校の西洋画科に入学した片多徳郎、金澤重治、野元義雄、神津港人、工藤三郎、浅井松彦、熊岡美彦、斎藤素蔵(知雄)、佐藤哲三郎、北島浅一、清原重以知(重一)、三国

久、御厨純一、萬鐵五郎の14名からなっていた。

このうち、23日の上野精養軒での発会式には、土浦にいた熊岡と、渡欧中の北島をのぞく12名が集まつた。この会はいわゆる同人だけの研究会としての色彩が強かつたが、そこには、先の「二十六人画会」において見られた「動機」の意気込みが潜められていたことも確かであつた。同人のひとり、神津港人は「四十年社」第6回展にあたり、「四十年社自讃」を述べているが、そこに彼ら同人たちの胸の内を見てとることも可能であろう。曰く「吾等は吾等のまちのぞむ所のものを吾等のうちに見出して之を他に施さむが為の展览会だと思つて」と。この意欲が、最終的に第一美術協会設立の気運を生むことになったと思われる。

昭和4年(1929)、「四十年社」の有志の間で、「新たに力強い団体を作つて、画界に邁進しよう」という機が熟するとともに、それまでの同窓会的結合を打ち払つた新たな会を組織する気運が盛り上がつた。同年2月、新宿の中村屋で発会式をあげ、ここにはじめて第一美術協会が設立された。「四十年社」からの会員である片田、北島、栗原、三国、御厨、佐藤らに、同志として、青山熊治、武田榮(彫刻)、吉田久継(彫刻)、浜地清松、小林真二、小林克己、樺藤種男、江藤純平、岩井尊人らが加わり、総数15名の創立会員によって、第1回展へ向けて準備が進められた。創立当時、世評では、第一美術が「四十年社」の延長ないし再生と見られていたというが、会員の意識には、全く別個の組織との認識があった。しかし、事實として、協会の多数を美校出身者が占めていたこともまた確かであり、いわばその後帝展の登竜門として、いわば帝展予備軍としての意義を担つたことからみて、「四十年社」あるいはそれ以前からの会の性格は基本的には変わっていないと見るべきであろう。

同年5月25日から6月19日まで、東京府美術館で第1回展が開かれた。一般出品者は、絵画部700余名の2500点に達し、この中入選者187名、220点。彫刻部も120点中11名13点の入選を出した。



北島浅一
ポーズする裸婦
湯欧作

この第一美術も初期の活況の中に、昭和7年(1932)、会の代表的な存在であった青山熊治が急逝し、一方もうひとりの代表者片多徳郎も、昭和9年(1934)退会そして急死と、相づぐ会の有力者の喪失によって、一挙に第一美術は危機に陥つた。片多が退会したこの年、会は解散と更生の意見に分れ、対立することとなつた。結局、江藤、樺藤、北島らは、他の4人の会員らとともに退会することとなり、栗原、三国、御厨らがひき続き会を運営し、この難局にのぞむこととなつた。

その後、北島は無所属として文展に出品をつづけ、御厨は、第一美術協会の理事として会の運営に当たつていいくことになる。

結果として、その後の画風においてみるとかぎり、北島、御厨が、この分裂を境に、それぞれが新たな道を模索したという変化を見てとることができないが、すでに2人とも50歳という晩年の域に達しようとしていたのであつてみれば、美校時代より今にいたるまで、洋画壇のアカデミズムの一兵卒として刻苦した姿は、あとは晩年の余韻の中に消えゆくのみであったろうか。北島、御厨とその仲間達は日本の近代洋画史のアカデミズムの周縁を形づくりことで、時代の人となつていったと思えるのである。

参考文献

1. 御厨純一「第一美術協会沿革1~3」(『第一美術』第一美術協会 昭和11年8月~11月)
2. 神津港人自筆及び関係資料
3. 『東京美術学校一覧(大正6~大正7)』(東京美術学校 大正7年2月)
4. 『青山熊治展』図録(兵庫県立近代美術館 昭和47年6月)
5. 『片多徳郎・遠山五郎展』図録(北九州市立美術館 昭和54年6月)
6. 『萬鐵五郎展』図録(岩手県立博物館 昭和60年10月)
(学芸員 松本誠一)



御厨純一
鏡を持つ裸婦
1928

資料紹介 誓田西分貝塚出土の銅鏡

佐賀県立博物館では、昭和60年度の特別企画展「古代史发掘—新出土品にみる九州の古代文化—」を本年2月8日から3月2日まで実施した。

ところで、この展览会の準備中に、久しく考古学界との関係が切れていた「詫田貝塚出土の銅鏡」を実見する機会にめぐまれ、さらに所蔵者の厚意により同展に展示紹介することができた。この銅鏡を展览会場に見出した考古学研究者の何人かは、永い間、行方不明になっていた我が子を探し出したような表情をみせたのが印象的であった。

(1)いわゆる「詫田貝塚出土の銅鏡」とは今から半世紀以上も前に、旧・神埼郡城田村大字詫田西分に所在する詫田西分貝塚から出土したと推定される無茎で扁平な銅鏡である。

詫田西分貝塚は弥生時代から中世までの各種遺構が複合した大規模な集落跡として古くから著名である。貝塚の現在の所在地名は、神埼郡千代田町大字詫田字本村・一本松・二本松・津芦である。佐賀県教育委員会が実施した昭和57年度以降の調査では、縄文時代の終りごろにこの沖積平原へと人びとが定着はじめたと推測される土器片も出土している。しかし調査された詫田西分貝塚の主体をなすのは、弥生時代の中期のものである。掘立柱建物跡・貯蔵穴・井戸跡・溝などが発見され、鐸形土製品や鳥形木製品をはじめ各種の木器が出土している。

銅鏡に関する最初の報告は、昭和7年(1932)に松尾禪作氏が行っている。同氏の執筆した「詫田貝塚の研究」(『佐賀県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3輯 1932年)によると「……大隈氏所蔵銅鏡が詫田貝塚東部薬師寺址附近より出土せり……今当時の発掘者を搜索中……」とある。

それから時をおいて昭和25年(1950)に松尾氏は「目達原古墳群調査報告(前記の報告) 第9集(1950)」の中で、銅鏡の略図を示すとともに、「詫田西分貝塚の東北隅薬師堂附近から……銅鏡が出ていている。今神埼郡城田村字下板^(注)井 医師大隈豊三氏が所蔵して居られるがその出土状態は明らかでない」と記している。それに続けて松尾氏は慎重な言いまわしながら、弥生時代の銅鏡である可能性を認め、さらに実用には余りに大きすぎるのではないか研究の余地があることを指摘した。

さうに松尾禪作氏は昭和32年(1957)刊行の『佐賀県考古大観』に銅鏡の写真を紹介し、先の見解を一步進めて「実用品というより儀器らしく……」と記述し、付表中では銅鏡の種別を「祭祀用」と明記している。

以上がこの銅鏡に関する基本的な知見であり、その後は出土事実が語られることがあっても、銅鏡そのものは考古学研究者の目にふれることはなかったのである。

しかし、銅鏡は松尾氏報文のように大隈豊三氏、さらには令室のタカさん、そして現在は御子息の大隈良貴氏(佐

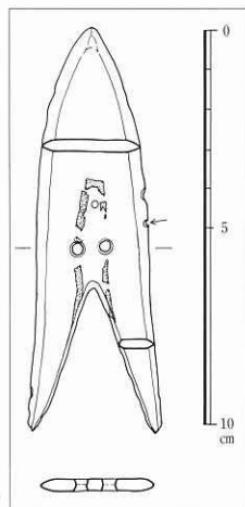
賀市高木瀬町・大隈産婦人科医院長)が引き継がれて、出土以来今日まですくなくとも55年にわたって大切に保存されている。先年のこと、大隈院長の令夫人から所蔵の銅鏡の所在について博物館へ御一報があり、昨年末に拝見する機会を得た。銅鏡を実見してすぐ、松尾禪作氏が報告したものに相違ないことを確認した次第である。ここに銅鏡の現状を紹介し、あわせて所属時期その他について若干の考察を加えてみよう。

(2)銅鏡は扁平無茎
三角形鶲扶式で、
大型の鋳造品である。
出土時に付着していた包含層の黒っぽい
粘土が銅鏡の裏表面を覆って、全体が黒
緑色を呈している。
この錆着した粘土は、
むしろ銅鏡が出土後
に磨滅したり銅質が
風化するのを防ぐ役
割を果たしたよう
に判断される。刃部と
逆刺となる脚端部に
わずかな刃こぼれや
損傷がある以外は完
好な保存状況にある。

ほぼ30年前に松尾氏
が著作に掲載した写
真と比べても変化はないようである。現状が松尾氏報文
類の計測値と細部で異なるのは単なる計測上の誤差と認
定される。なお、説明の便宜上、実測図(第1図)に示
した面をA面、反対側をB面と呼称する。

銅鏡は全長10.3cm、脚端間(最大幅)3.35cm、厚さは
鋒部から脚部へとわずかに減じているが最大厚3.1mmで
ある。付着粘土を含めた重量は34.7gである。鏡の先端は
少し丸味をもち、両側の刃部は緩やかに膨みつつ途中から
は脚端部へ外方に張り出し気味である。基部は3.7cmほど
切れ込んで深い鶲扶部をなしている。

鏡の中軸線に対してほぼ対照的位置に、内径3mmほど
の2孔(孔径の中心距離6.5mm)があいている。これは鏡
をはさみ込むために先割れとなった矢柄の先端同志を緊
縛するための孔と認定される。A面で注目されるのは2
孔の上方にある小穴とそれらを囲むような灰緑色の銅鏡
地肌部分である。小穴は2孔から1.6cmほど先端側にあつ
て、直径は1.7mmほどである。B面側には貫通していない
。小穴は口徑よりも内広がりの巾着状を呈し、深さは
鏡の厚みの4分の3ほどである。この小穴は2孔とは三
角形の頂点に対応する位置にあって、本来小孔をあける



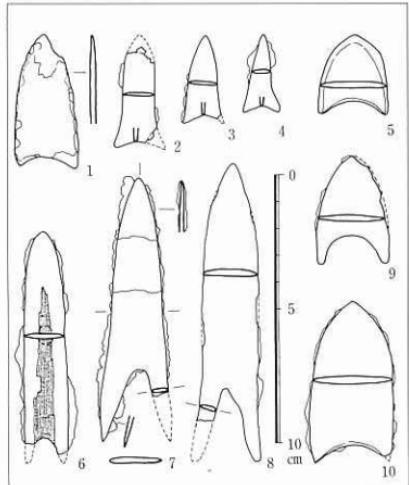
第1図 詫田西分貝塚出土銅鏡(A面)

製作意図があったかともみられる。しかし同じA面右側刃部にも小穴と類似した形状のいわゆるス（矢印のところ）が研ぎ残っている点からみて铸造時に生じた偶然の小穴と考えた方がよいようである。

また2孔と1穴附近にみられる灰緑色の地肌部分は、2孔や腸抉部との対応関係からしても、矢柄の鍛着物が剥離した痕のように見える。しかし、鍛着した粘質土を削ったと判断される部分もあって断定しえない。B面の現状は一層、推断に慎重さを求めるものである。

(3) 詫田西分貝塚から出土した銅鏃は、形態が特異な大形鏃であるが、銅質や刃部の形状から見て実戦用の鏃として充分に使用できたものである。ここで、銅鏃が一体いつの時期のものなのか検討してみよう。

弥生時代で最古の銅鏃は福岡県今川遺跡出土の有茎両翼銅鏃（前期初頭）であるが、このタイプは朝鮮半島からの單発の流入品で終わっている。また唐津市宇木波田貝塚出土の短鋒有茎式石鏃（夜臼式単純期）なども同様であろう。弥生時代前期の鏃の主体をなすのは韁繩晚期以来の伝統をもつ黒曜石製の打製石鏃（四基）である。扁平な無茎式磨製石鏃は九州では弥生前期後半以降に出現し地域によっては弥生終末期まで存在するようである。佐賀市大門西側（第2図1）は前期末の石鏃である。鉄鏃は前期初頭まで遡るといわれる椿葉式の有形鏃（今川



第2図 石鏃(1)と鉄鏃

- 1 佐賀市大門西(弥生・前中期) 2～4 福岡県吉ヶ浦(弥生・中期中頃) 5・8 福岡市小笹(弥生・後期前半) 6 長崎県シゲノダム(弥生・後期初頭) 7 長崎県原ノ辻(弥生・後期前半) 9 佐賀県千塔山(弥生・後期後半) 10 福岡県御床松原(古墳時代・中期) [原図は各報告書に依り、トレースにあたり一部を変更した。]

遺跡出土)があるが、なおその所属時期には検討の余地がある。福岡県吉ヶ浦遺跡出土の鉄鏃（第2図2～4）は前期以来の無茎鏃の形態を襲ったものである。九州の場合、鉄鏃は弥生後期を通じて無茎式が主流であり、有茎式は後期半以降に類例が増加している。無茎銅鏃は後期になると二系列に変遷するようである。すなわち一系は対馬シゲノダム遺跡例（第2図6）のように長鋒化した鏃の出現である。これは後期前半代にはさらに長大化するとともに脚部が外方に開いて腸抉の深い形態

（第2図7・8）が成立する。もう一系は小形・短鋒のまま横幅を増した形態（第2図5）

であるが後期後半以降

（第2図9）は長さも

長くなり古墳時代中期

（第2図10）まで続く

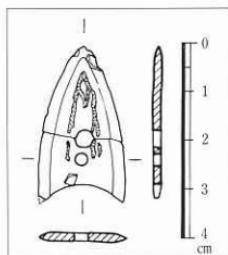
タイプである。

詫田西分貝塚出土の銅鏃は、出土層位・遺構や共伴遺物が不明であり、また他に類例のないものである。無茎式の扁平銅鏃は県内では東脊振村三津永田遺跡から七田忠氏が採集したもの（第3図）がある。復元長3.2cmで、大小2孔が縱に連なる小形鏃である。これと詫田例とはあまりにヒアースの大きいものである。また有茎式銅鏃は神崎町川寄吉原遺跡出土品（後期前半代）と諸富町村中角遺跡出土品（終末期か）があり、銅鏃の使用・流行期間を知る手がかりとはなろう。

詫田西分貝塚出土銅鏃の形態は、小形の無茎式鉄鏃が弥生後期前半代にとげた形態変化と対応・共通するものである。このように銅鏃からの影響が認められるならば、詫田銅鏃の製作年代の上限は弥生後期前半代に求められよう。また下限は弥生時代を下るものではなく、有茎式が盛行していく全国的傾向を背景として考えると、ほぼ後期前半代～中頃に比定して大過ないであろう。また製作地や鋳型は不明であるが、佐賀平野内の集落で铸造されたことも大いに考えられる近年の状況である。

詫田西分貝塚出土の銅鏃は実用鏃として十分な殺傷効果をもつものであり、祭祀用品として第一義的に製作されたか否かについては、今後の検討に委ねたい。

おわりに、資料紹介にあたり快諾をいただいた大隈良貴・七田民子両氏に謝意を表します。また紙幅の都合によって、参考・引用文献等を掲載しえなかつたこと関係各位の御諒解をお願いします。 （学芸員 藤口健二）



第3図 三津永田遺跡出土銅鏃
(七田忠志氏採集品)

刊行のご案内

佐賀県の歴史と文化 一目で見る郷土のあゆみー

佐賀県立博物館では昭和45年10月の開館以来、博物館が所蔵します資料を主体に、「佐賀県の歴史と文化」をテーマとした常設展を開催いたしています。

この常設展は、佐賀県の自然と風土をその背景とし、恵まれた環境の中でどのような生活を行い、獨特な文化を創造しててきたかを、自然史・考古・歴史・美術・工芸・民俗の各部門で系統的な展覧を試み、理解していくただくことに努めています。

一方、昭和58年10月に開館した美術館では、「佐賀県の近代の美術と工芸」の常設展の中で近代美術の流れを一望できるように、百武兼行・久米桂一郎・岡田三郎助・小代為重・高木背水などの作品を系統的に並べ、彫塑では古賀忠雄、工芸では酒井田柳右衛門(12代)・今泉今右衛門(12代)・中里太郎右衛門(12代)などの、レベルの高い作品を展示しています。

このたび、県総務部広報公聴課では広報紙『広報さが』において、当館所蔵資料による「佐賀県の歴史一誌上博物館ー」という26回におよぶ連載企画を、昭和59年1月から昭和61年3月まで実施し、佐賀県の歴史の成り立ちと博物館の常設展の紹介を併せて試みています。その結果、この連載企画が好評で、歴史研究関係者や博物館・美術館の利用者の多くの人々から、1冊の本にまとめて刊行して欲しいという希望が相つきました。また、学校関係者の方々からは、郷土教育の副読本として利用したい旨の希望が多くありました。

そこで、博物館では下記のとおりの要項で、刊行を行いました。

表題 「佐賀県の歴史と文化一目で見る郷土のあゆみー」

体裁 B5判 64ページ(本文52ページ・資料編10ページ)

全ページカラー仕上げ

本文 広報さが、26回連載「佐賀県の歴史一誌上博物館ー」

編集 佐賀県立博物館、佐賀県総務部広報公聴課

発行 佐賀県立博物館

発行年月 昭和61年9月10日

頒布価格 800円(郵送希望の方は送料(一冊)300円)

注文先 佐賀県立博物館

〒840 佐賀市城内1丁目15の23

Tel (0952)-24-3947

本文の体裁は原本の形をそのまま使用し、新たに資料編として博物館・美術館施設の概要や県内の博物館・美術館・資料館等文化施設の紹介、佐賀県関係歴史年表をも加えています。

私達が生活をします郷土の歴史の成り立ちを、多くの

カラー図版とやさしい解説文で、もう一度確かめてみませんか。

[本文内容]

- ① さがの風土—豊かな自然—
- ② 化石—地質時代の遺物と生きた化石—
- ③ 旧石器時代—石器を作った人々—
- ④ 縄文時代(上)—狩猟・漁撈・採集の生活—
- ⑤ 縄文時代(下)—稻作の始まり—
- ⑥ 弥生時代(上)—稻作農耕のひらがり—
- ⑦ 弥生時代(中)—農耕社会の発展—
- ⑧ 弥生時代(下)—くにぐにの成立—
- ⑨ 古墳時代(上)—地方の豪族たち—
- ⑩ 古墳時代(下)—古代の技術革新—
- ⑪ 奈良・平安時代(上)—最古の記録・肥前国風土記—
- ⑫ 奈良・平安時代(下)—仏教文化の普及—
- ⑬ 鎌倉・室町時代(上)—貴族の社会から武士の社会へ—
- ⑭ 鎌倉・室町時代(下)—地方文化の時代へ—
- ⑮ 竜造寺から鍋島へ—今山の戦から藩政の確立へ—
- ⑯ 名護屋城—五層の天主閣とひしめく陣屋—
- ⑰ 佐賀の工芸(上)—やきものの国・肥前—
- ⑱ 佐賀の工芸(下)—秘められた染織史—
- ⑲ 唐津藩の産業—肥前国産物図考より—
- ⑳ 近世の文教(上)—「葉隠」と学問の象徴「聖堂」—
- ㉑ 近世の文教(下)—近代日本をつくった藩校と民間塾・寺子屋の教育—
- ㉒ 幕末の佐賀(上)—国内最高の科学技術の展開—
- ㉓ 幕末の佐賀(下)—アームストロングの砲声—
- ㉔ 有明海の生活—漁法と漁具—
- ㉕ 農山村の生活—道具にみる農・林業の歴史—
- ㉖ 佐賀の住まい—尾根の形と生活用具—



青銅器研究覚書

弥生時代青銅器研究の一視点

昭和55年1月の鳥栖市安永田遺跡の銅鐸鋄型の発見は、弥生時代における「銅鐸文化圏」と「銅劍・銅矛文化圏」といった相対立する文化圏の設定に根本的な再検討を迫るものであった。その後の福岡市席田遺跡の銅鐸鋄型、佐賀県千代田町姫遺跡の銅劍・銅矛鋄型、佐賀県大和町惣座遺跡の銅劍・銅矛鋄型、島根県荒神谷遺跡の大量の銅劍・銅矛・銅鐸の一括埋納、福岡市吉竹高木遺跡の銅劍・銅矛・銅戈・多錐細文鏡等多量の副葬青銅器、大分県別府遺跡をはじめ各地の小型銅鐸、佐賀県神埼郡一帯の鐸形土製品などの相次ぐ発見は、弥生時代青銅器研究の部分的見直しにとどまらず、青銅器を念頭においていた弥生文化の本質的な再吟味を必要としている。同時に弥生時代青銅器文化に対する新たな見通しを可能にしているともいえる。したがって、これまでの青銅器の形式的分類、原流、系譜、編年についての既成の概念をまず洗い直すか、またはそれとらわれない形式分類、編年についての基礎的作業や資料操作が必要となってこう。

まずは、各青銅器類の名称である。銅劍・銅矛・銅戈・銅鐸等は從来から使い馴れてきた名称であるが、一説は、劍・矛・戈で祭器として使用されたり、製作されたものは武器形祭器とし、実用性の高い副葬器として出土することの多い青銅利器とは画然と区別することとし、銅鐸は從来のまま銅鐸とし、銅鐸文化圏と武器形祭器圏があり武器形祭器圏の中に、劍・矛・戈、各々で地域的特徴をもたせて、青銅器の性格とそれを用いた祭祀の特徴づけを行った考え方である。

これは、從来の銅劍・銅矛文化圏を一樣に捉える考えに対して、後半期の形式の青銅利器の分布圏、とくに銅矛は海洋的と性格づけし、航海とかかわりの深い祭器として捉え、銅戈が内陸的分布をもつと対称し、青銅利器祭祀に対する新たな問題提起を行ったものである。しかし、この一連の考え方の底流には、銅鐸文化圏の広範囲性と同一性を強調し、銅劍・銅矛文化圏に対する銅鐸文化圏の優位性を証明しようとする「思潮」がうかがえるところに、この説の科学性において大きな弱点がある。この場合、銅劍・銅矛・銅戈を一括して武器形祭器あるいは、剣形祭器、矛形祭器、戈形祭器とするならば、当然、銅鐸を鐸形祭器として呼称するなり、器種分類を行うべきであろうが、そこまで考えないのがこの論者達の特徴である。鐸は、中国では古来から、鈴の大きいものとしており、舌を失い鈴としての用途からははずれ、「聞く銅鐸から、見る銅鐸」へと変化した銅鐸は、鐸形祭器と呼ぶのが正しいのではないか。

私見では、從来通りの器種の呼称で良いと考える。青銅器各種が、初期には、実用性の高い宝器的なもので、

後期には祭器的性格のものに変化するといった從来の定見は、必ずしも確実な証拠に裏付けられたものではなく、あくまで仮説のひとつであり、弥生人の青銅器への思い入れを正確に説明したものとはいえない。最近の青銅器における新たな知見は、青銅器の用途における特性が多様で、単純でないことを示しており、一定の解釈に誘導するような、名称および形式分類は避けるべきだろう。

また、銅鐸についていえば、朝鮮系小銅鐸、銅鐸形銅製品、銅鐸形土製品の呼称の問題である。朝鮮系小銅鐸は、朝鮮半島特有の小型の銅鐸で、日本の銅鐸の祖形とされており、九州北半分に分布する小型の素文の銅鐸のことである。最近、各地でこの種の小形銅鐸が発見され、また、佐賀県を中心鐸形の土製品の発見が相次いでいるが、弥生中期前半の古い時期のものでも、単純に、朝鮮半島の小銅鐸に祖形があるといい難く、日本独自といわれる有文の銅鐸との関係も考えられる。したがって、朝鮮系小銅鐸は定見のない修飾はとり去って、銅鐸とし、小型・素文と分類すべきである。銅鐸形土製品も、畿内を中心とした地域は、常に、その時の有文銅鐸を祖形としているが、九州の場合、土製品として、時代とともに、独自の変化過程をたどっており、銅鐸形といった修飾をかぶせるのはなじまない。銅鐸形土製品は、鐸形土製品とし、素文・有文に分類すべきである。銅鐸形銅製品にいたっては、何をかいわんやである。

銅鐸には、小型素文のものと、中～大型有文のものとがあることは、はっきりした。鐸形土製品を含め小型素文のものは、集落跡など生活遺跡からの出土が多いが、中～大型のものは、衆知のように地域的に特定の埋納遺跡からの出土である。小型銅鐸の出土状況から、小型の銅鐸等はプライベートなもの、中～大型のものはパブリックなものといえないだろうか。どのような祭祀に用いられたかの断定は難しいが、時代は降るが、三国志高句麗伝と韓伝での「鈴」を用いた祭祀に関する記述は示唆的である。

のことから、朝鮮半島の小銅鐸が日本の銅鐸等の祖形となったことが正しいとすれば、朝鮮半島に家族的・プライベートに用いられた鐸と部族・氏族といったパブリックな用いられる方の鐸、そして使用の形体—祭祀—も、日本の弥生時代の青銅器祭祀の祖形になっていると考えられないであろうか。中～大型の有文の銅鐸も朝鮮半島の彼地に祖形を求めて良いのではないかといいたいのである。銅鐸の二系統論である。

結論を急ぐが、他の青銅利器についても、実用性と祭器の性格は、日本において当初から兼ね備えていた両特性であり、後半期の形式への変化は、祭祀という伝統的性格が素材を青銅器に求めた結果ではないか、実用性は、鉄器へと受け継がれたのである。その意味で、青銅利器の形式編年は、系譜の面で、多元・多様にとらえなおす

ことも考えてはと思っている。弥生社会は、これまで考えられてきたように単純なものではなく、多様なものを内包しており、その事実を認めることにより、新たな総

合の観点が生まれてくるのである。荒神谷遺跡の発見は、このことを強く訴えている。

(副館長 高島忠平)

行事のお知らせ (昭和61年度)

会 場	第2期常設展	第3期常設展	内 容	観 覧 料
博物館	中展 大展 1号	6/19(木)～10/19(日) 11/27(木)～3/31(火)	佐賀県の地質や自然・先史時代から近代にいたる歴史と文化について自然・科学・考古・歴史・美術工芸・民俗の各部門について系統的に資料を展観。	大人 200 (150) 大・高生150 (100) 中・小生 70 (50)
	2号			
	3号	6/19(木)～9/15(月)		
美術館	1号	6/19(木)～10/19(日)	郷土出身作家の彫塑・陶磁・染織・金工などの代表的工芸品をはじめ、百武兼行、久米桂一郎、岡田三郎助、小代為重、高木背水などの近代洋画を紹介。	（ ）内は20名以上の団体。
	2号	7/3(木)～10/19(日)		
	3号	7/3(木)～9/15(月)		
		11/27(木)～3/8(日)		

企画展

展 覧 会 名	会 期	会 場	展 覧 会 名	会 期	会 場
第18回 佐賀県勤労者美術展	9月3日～9月7日	美術館	農協共済小中学生 第11回 交通安全ポスター展 第22回 書道展	10月15日～10月19日	美術館
第7回 九州新工芸展	9月10日～9月15日	美術館	第36回 佐賀県美術展	11月1日～11月9日	博物館
第36回 佐賀県児童生徒理科作品展	9月19日～9月26日	博物館	第10回 佐賀県高等学校芸術祭 美術・書道展	11月15日～11月24日	美術館
北島浅一・御厨純一展	9月27日～10月19日	美術館	第27回 学童美術展	11月26日～11月30日	美術館
第5回 よみがえれ佐賀展	10月4日～10月12日	博物館			

館内販売図録案内

図 錄 名	単 価	図 錄 名	単 価
古 代 史 発 掘	1,900円	山 口 猛 彦	1,000円
亮 茶 翁	1,200円	近 代 の 日 本 画	1,600円
鏡 玉 剣	1,500円	近 代 ・ 九 州 の 洋 画 家 た ち	1,500円
岡 田 三 郎 助	1,700円	佐 賀 県 立 博 物 館	300円
古 賀 忠 雄	1,300円	肥 前 の 中 世 美 術	1,800円
三 根 霞 郷	700円	佐 賀 県 方 言 語 典	350円

博物館・美術館報 第74号	発 行	佐賀市城内1丁目15番23号
発行年月日 昭和61年9月20日		佐賀県立博物館
編集 大塚正道	印 刷	佐賀県立美術館 柳大同印 刷